

学生図書委員だより

No.7

発行・二〇〇九年七月
編集・学生図書委員



特集 文庫で夏まるかじり。

今年も夏がやってきまして！ 今回は夏に読みたい文庫が盛りたくさん。さあ、あの波に乗り遅れるな！ というわけで、どしどし行きますよー！

まずは『サウスバウンド』（奥田英朗）。破天荒な父に振り回される小学生・次郎はもうウンザリ。元過激派っていうけど、僕のお父さんっていうたい何者？ パワーがあつてグイグイ読める、夏バテにも効く一冊です。物語の後半で、舞台は沖繩に移ります。

夏のオススメ文庫は、他にも青春時代小説『夏雲あがれ』（宮本昌孝。前巻に『藩校早春賦』）や、飛び込みでオリンピックを目指す少年達を描いた『DIVE!!』（森絵都）など。夏らしいさわやかさと、青春の瑞々しさが魅力です。読むだけで涼しくなれるかも。

そして夏と言えば、なんともいってもホラー。じめじめした日本の夏には、背筋ひんやり、の怪談がうつつけ。『夏と花火と私の死体』（こゝろ）は、ぞくぞく迫るスリルと日本の田園風景が見事にマッチした一品です。ハリウッド映画ばりの山場と、夏の終わるほの

かなさみしさの融合は「読むべし！」の一言。傑作ですよ。

あとは、猛暑の夏に閉鎖的な村で起こる事件を追った、超大作ジャパネスクホラー『屍鬼』（小野不由美）、どこまで行ってもたどり着けない陽炎を追うようなミステリアスな異色作『ユージニア』（恩田陸）などなど。

そして、夏といえば思い出すのは読書感想文。きつと苦労した人も多いはず。でも、嫌な思い出のせいで少年少女の夏の傑作を読み逃していませんか？ 少年達とおじいさんとの不思議なひと夏の友情を描く『夏の庭』

『Friends』（湯本香樹実）、廃工場に立てこもり、大人たちへの「叛乱」を起こす『ぼくらの七日間戦争』（宗田理）。どちらも夏休みの定番ともいべき傑作ですが、名作というイメージとは違い、かなり砕けた文章で読みやすい。きつと内容の深さに驚くはずです。 なんだかんだいって、学生時代の夏の思い出は特別なようです。本の中でこれほど取り上げられてるんだから、きつとそうなんでしょう。今は、わからないけどね。

今月の三首

赦せよと請うことなかれ赦すとは
ひまわりの花の枯れるさびしさ

松実啓子

この青すぎる空の下では、君の言葉も嘘にしかならないよ。

きみに逢う以前のほくに遭いたく
て海へのムスに揺られていたり

永田和宏

潮の匂いと、きらきら光る波に、一日
が終わった頃がよみがえるんだ。

あの夏の数かぎりなきそしてまた
たつたひとつの表情をせよ

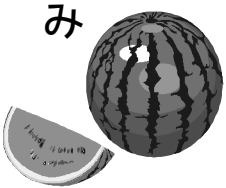
小野茂樹

数え切れないほどの君を、せめて、た
つたひとつの夏に残しておくれ。

特別企画

夏の100冊

そろい踏み



毎年夏に、新潮・角川・集英社それぞれの出版社から、「夏の百冊」と題して文庫本のフェアがあつているのを知っていますか？ 戦略を凝らしたラインナップと、必ずもらえる豪華（？）商品は、もはや夏の恒例行事となりつつあります。

新潮は名作の割合が高いのが特徴。パンドラの yonda君がいる、黄色い帯が目印です。角川は青春モノをプッシュしているのか、瑞々しさが売りですね。こちらは緑がイメージカラー。最後は集英社。今年はどうな装丁でわれわれを驚かせてくれるのか楽しみ。爽やかな青で新鮮さをアピール？

このフェアは好評のためか、年ごとに装丁に力が入り、商品も豪華になっていくみたいです。買ったらず商品がもらえるなんて嬉しい！ 出版社さん、赤字にならない程度に豪華にしてね。